

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 28 日現在

機関番号：15101
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22531068
 研究課題名（和文） 発達障害児における行動障害に関する有効なコンサルテーションシステムの開発
 研究課題名（英文） Development of Effective Consultation System of Behavioral Disorders for Students with Developmental Disabilities
 研究代表者
 井上 雅彦（INOUE MASAHIKO）
 鳥取大学・医学系研究科・教授
 研究者番号：20252819

研究成果の概要（和文）：発達障害のある子どもとかかわる教師を対象に行動障害に対するコンサルテーションプログラムを開発し、その効果を検討した。研修は講義とグループ演習から構成され、1回2時間で連続8回実施された。結果、19名中17名(89.5%)の参加者が支援計画を作成し、14名(73.7%)が支援計画を実施し、このうち12名(63.1%)が行動上の改善を示したことを報告した。プログラムの受講前と受講後の参加者のGHQ得点については統計的な有意差はみられなかったが、支援計画が立案実施でき、効果が確認できた参加者については、8名中6名が改善を示した。通常学級に関わる教師に対する研修や支援のあり方と、支援計画実施を可能にする条件について論議された。

研究成果の概要（英文）：We evaluated the effects of consultation program of behavioral disorders for teachers who were in charge of the students with developmental disabilities. The program consists of lectures and group discussions, which was carried out eight consecutive times for two hours. The results showed that 17 of 19 (89.5%) participants made their support plans, 14 (73.7%) carried out their support plans and 12 (63.1%) showed improvement of the problem behaviors. There was no statistically significant difference between pre GHQ score and post GHQ score. However, six of eight participants who designed support plans and reported improvements of their students were improved their GHQ score. Ideal method of the training programs for regular classroom teachers was discussed

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：行動障害・学校コンサルテーション

1. 研究開始当初の背景

特別支援教育において教師が最も指導困

難を感じる「行動上の障害」については、

担任支援として様々な校内支援体制の整備、巡回相談による外部コンサルテーションが行われている。行動障害に対するコンサルテーションの有効性は、いくつかの研究によって示されているが、行動障害に対する過去5年間の学会発表や学術論文の実践研究の分析結果（井上ら 2009）からは、専門家による巡回回数が20回を超えるような実践が多い現状があり、コンサルタントの養成や効率的なコンサルテーション方法の確立が望まれる。

2. 研究の目的

行動問題に対する有効なコンサルテーションを行うために、子ども、学校、コンサルタントの要因について調査し、それをふまえたコンサルテーションプログラムを開発しその有効性を検証することを目的とした。本報告では本研究の最終目的であるコンサルテーションプログラムの効果を中心に報告する。

3. 研究の方法

(1) 参加者

本研究の趣旨を理解し協力を承諾した教師19名を対象とした。教師が担当している児はADHD、自閉症、高機能自閉症、アスペルガー、知的障害と多種にわたっていた。支援計画の対象となった子どもの問題となる行動は、小学校では、課題からの逸脱や、離席、友達への暴力があげられた。幼稚園でも同様に、課題からの逸脱、友達とのトラブルなどが課題として取り上げられた。

(2) プログラム

プログラム（全8回）は原則として週一回、土曜日に行われ、一回の時間は講義1時間とグループワーク1時間の計2時間から構成された。グループは参加者5-6名の固定とし、グループワークの際には、毎回、応用行

動分析を学んでいる大学院生（現職教員）がスタッフとして各グループに1-2名ついた。

4. 研修プログラムの評価方法

(1) 参加者が作成した支援プログラムの実施状況

参加者が研修プログラム内で作成、実施した行動支援計画について、①計画は立案できたか、②計画を実施することができたか、③効果はあったか、④行動観察の記録をつけることができたかの4つの基準で評価した。

(2) GHQ30 (General Health Questionnaire)

参加者の精神健康度の評価に日本版GHQ30を用いた。GHQ30は、2-3週間間の心身の健康状態を尋ねる30項目からなる4件法の質問紙であり、一般的疾患傾向、身体的症状、睡眠障害、社会的活動障害、不安と気分変調、希死念慮うつ傾向の6つ因子のスケールから構成されている。参加者の精神健康度を把握し、講座進行や個別的支援の参考にす他、研修プログラム開始前と終了後の2回実施することによって得点の変化を検討した。

(3) 事後アンケート

参加者の満足度や本研修プログラムに参加したことで子どもの問題行動の捉え方や、子どもへの接し方に変化があったか否かを調べるために表4にしめすアンケートを実施した。

4. 研究成果

19名中17名(89.5%)の参加者が支援計画を作成し、14名(73.7%)が支援計画を実施し、このうち12名(63.1%)が行動上の改善を示したことを報告した。研修プログラムの受講前と受講後の精神健康度については統計的な有意差はみられなかったが、支援計画が立案実施でき、効果が確認できた参加者につい

ては、8名中6名が改善を示した。

本研修プログラムへ参加した19名の平均の出席率81.25%であり、ドロップアウトが疑われる連続欠席者は2名であった。本研修プログラムが一度に多くの参加者を対象としながらも、良好な結果を得た要因としては、講義による効果だけではなく、各自が担任している子どもの支援計画を実際に作成し、各自が講座の間に実際に実践し、結果を持ち寄りグループやスタッフメンバーと確認したり修正を繰り返しながらの演習を重視した点にあると考えられる。この形態はPLAN-DO-SEEという特別支援教育の方法論を研修形式で具現化したものであり、支援計画、実施、見直しという連鎖の中での演習中心の連続研修の有効性を示唆するものであるといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計39件)

- ① 藤坂龍司、井上雅彦、自閉症早期家庭療育のための集団指導プログラム、行動療法研究、査読有38(1)、2012、57-70
- ② 松尾理沙、野村和代、井上雅彦、発達障害児の親を対象としたPTの実態と実施者の抱える課題に関する調査、小児の精神と神経、査読有、52(1)、2012、53-59
- ③ 岩橋由香、相本広幸、藤原秀文、井上雅彦、知的障害のある児童に対する交流学級児童のかかわり行動を促進させるための障害理解授業の効果、特殊教育学研究、査読有、49(5)、2012、517-526
- ④ 井上雅彦、岡田涼、野村和代、安達潤、辻井正次、大塚晃、市川宏伸、強度行動障害における自閉症障害との関連性-日本自閉症協会評定尺度(PARS)短縮版による分析、精神医学、査読有、vol.54 NO.5(641)、2012、473-481
- ⑤ Hiroyuki Ito, Iori Tani, Ryoji Yukihiro, Jun Adachi, Koichi Hara, Megumi Ogasawara, Masahiko Inoue, Yoko Kamio, Kazuhiko Nakamura, Tokio Uchiyama, Hironobu Ichikawa, Toshiro Sugiyama, Taku Hagiwara, Masatsugu Tsujii, Validation of an interview-based rating scale developed in Japan for pervasive developmental disorders
Research in Autism Spectrum Disorders 6、2012、1265-1272
- ⑥ 伊藤 大幸、谷 伊織、行廣 隆次、内山 登紀夫、小笠原 恵、黒田 美保、稲田 尚子、萩原 拓、原 幸一、岩永 竜一郎、井上 雅彦、村上 隆、染木 史緒、中村 和彦、杉山 登志郎、内田 裕之、市川 宏伸、田中 恭子、辻井 正次、適応行動尺度の開発 不適応行動尺度の信頼性・妥当性に関する報告、精神医学、(浜松医科大学子どものこころの発達研究センター)、査読有、54(9)、2012、889-898
- ⑦ 井上雅彦、岡田涼、野村和代、上田暁、安達潤、辻井正次、大塚晃、市川宏伸、知的障害者入所更正施設利用者における強度行動障害とその問題行動の特性に関する分析、精神医学、査読有53(7)、2011、639-645
- ⑧ 井上雅彦、人間行動分析学への発展のために一言語行動における理論行動分析の臨床場面への応用、行動分析学研究、査読有、26(1)、2011、46-50
- ⑨ 井上雅彦、行動分析学による自閉症療育におけるエビデンス、臨床心理学、査読有、12(1)、2011、16-19
- ⑩ 井上雅彦、エビデンスに基づいた自閉症療育応用行動分析学に基づくアプローチ

の成果と課題、小児の精神と神経、査読有、51(4)、2011、323-327

- ⑪ 野村和代、鈴木将文、井上雅彦、杉山登志郎、強度行動障害の再検討1、強度行動障害特別処遇事業における対象事例の支援。経過についての分析、小児の精神と神経、査読有、50(3)、2010、291-296
- ⑫ 式部陽子、橋本美恵、井上雅彦、保健士を中心とした発達気になる子どものペアレント。トレーニングの試み、小児の精神と神経、査読有、50(1)、2010、83-92
- ⑬ 原口英之、井上雅彦、発達障害児の問題行動のアセスメントに関する面接者トレーニングの効果、行動療法学研究、査読有、36(2)、2010、131-145
- ⑭ 野村章司、井上雅彦、高階美和、自傷行動を示す知的障害児に対する家族支援、月1回の母親へのコンサルテーションを通して、特殊教育学研究、査読有 47(5)、2010、307-315
- ⑮ 井上雅彦、二次障害を有する自閉症スペクトラム児に対する支援システム、脳と発達、査読有、42(3)、2010、209-212
- ⑯ 橋本俊顕、井上雅彦、自閉症スペクトラムへの対応一児の将来を念頭に、脳と発達、査読有、42(3)、2010、191-192
- ⑰ 井上雅彦、井上菜穂、発達障害児の不登校および行動問題の再発を予防。改善するための条件、臨床心理学、査読有、10(1)、2010、33-37

[学会発表] (計 54 件)

- ① 井上雅彦、発達障害児の親に対するグループペアレントトレーニングの効果-課題達成とメンタルヘルスの分析、日本小児神経学会第 54 回大会発表論文集、ロイトン札幌、2012 年 5 月 17 日~19 日
- ② 井上雅彦、「発達障害とペアレント・トレーニング」企画趣旨、日本小児精神神

経学会第 107 回大会発表論文集、立正大学、大崎キャンパス石橋湛山記念講堂、2012 年 6 月 16 日~17 日

- ③ 井上雅彦、自閉症スペクトラムのペアレント・トレーニング、シンポジウム、日本小児精神神経学会第 107 回大会発表論文集、立正大学、大崎キャンパス石橋湛山記念講堂、2012 年 6 月 16 日~17 日
- ④ 井上雅彦、「合理的支援としての応用行動分析学」、シンポジウム、日本小児診療多職種研究会第 1 回大会発表論文集、北九州国際会議場、2012 年 7 月 15 日
- ⑤ 井上雅彦、特別支援学校における行動障害のある児童・生徒への対応、自主企画シンポジウム、日本発達障害学会第 47 回大会発表論文集、横浜国立大学常盤台キャンパス、2012 年 8 月 11 日~8 月 12 日
- ⑥ 料崎智秀、澤勝也、柿本綾香、矢部達也、岡崎奈津、濱田実央、尾田まゆみ、上畑智子、井上雅彦、広汎性発達障害児の親に対するペアレントトレーニング、親子でのボードゲームを活用した SST に焦点をあてたプログラムの効果の検討、日本行動分析学会第 30 回大会発表論文集、高知城ホール、2012 年 9 月 1 日~2 日
- ⑦ 藤坂龍司、井上雅彦、親訓練における講義と実習の効果、日本行動分析学会第 30 回大会発表論文集、高知城ホール、2012 年 9 月 1 日~2 日
- ⑧ 井上雅彦、「ペアレント・トレーニング」の課題とこれから-ペアとれ先駆者の実践から今後の展望を探る、自主シンポジウム、日本行動療法学会第 38 回大会発表論文集、立命館大学、衣笠キャンパス、2012 年 9 月 21 日~23 日
- ⑨ 料崎智秀、矢部達也、金森純平、井上雅彦、広汎性発達障害児に対する自己管理

- スキルトレーニングプログラムの有効性の検討、日本行動療法学会第 38 回大会発表論文集、立命館大学、衣笠キャンパス 2012 年 9 月 21 日～23 日
- ⑩ 尾田まゆみ、井上雅彦、特別支援学校に在籍する強度行動障害を呈する生徒の担任教師に対するコンサルテーション、日本行動療法学会第 38 回大会発表論文集、立命館大学、衣笠キャンパス、2012 年 9 月 21 日～23 日
- ⑪ 井上雅彦、「学校」という環境への認知行動療法の適用と貢献、大会企画シンポジウム、日本行動療法学会第 38 回大会発表論文集、立命館大学、衣笠キャンパス、2012 年 9 月 21 日～23 日
- ⑫ 岩橋由佳、中島玲、井上雅彦、脅迫症状をもつ発達障害者への暴露反応妨害法の効果、日本行動療法学会第 38 回大会発表論文集、立命館大学、衣笠キャンパス、2012 年 9 月 21 日～23 日
- ⑬ 近藤裕彦、井上雅彦、強度行動障害への対応に有効な支援手法の検討、日本特殊教育学会第 50 回大会発表論文集、つくば国際会議場、つくばカピオ、2012 年 9 月 28 日～30 日
- ⑭ 柿本綾香、井上雅彦、アスペルガー症候群のある子どもにおけるインターネット依存傾向とゲーム依存傾向の影響-不登校傾向への影響の検討、日本特殊教育学会第 50 回大会発表論文集、つくば国際会議場、つくばカピオ、2012 年 9 月 28 日～30 日
- ⑮ 澤勝也、井上雅彦、一人暮らしを目指した視覚障害者に対する短期歩行指導とフォローアップの効果、日本特殊教育学会第 50 回大会発表論文集、つくば国際会議場、つくばカピオ、2012 年 9 月 28 日～30 日
- ⑯ 井上雅彦、児童精神科における親支援プログラムの展望-発達障害のある子どもの親支援プログラムとそのバリエーションの拡大、シンポジウム、日本児童青年精神医学総会第 53 回大会発表論文集、都市センターホテル/シェーンバッハ・サボー、砂防会館、2012 年 10 月 31 日～11 月 2 日
- ⑰ 吉川徹、加藤香、小倉正義、大沢佑輝、竹澤大使、日詰正文、井上雅彦、発達障害その他-専門家等によるペアレントメンター活動支援システムに関する予備的調査、日本児童青年精神医学総会第 53 回大会発表論文集、都市センターホテル/シェーンバッハ・サボー、砂防会館、2012 年 10 月 31～11 月 2 日
- ⑱ 澤勝也、料崎智秀、井上雅彦、中途視覚障害者への外出行動を増加させるための歩行訓練の効果、日本行動分析学会第 30 回大会発表論文集、高知城ホール、2012 年 9 月 1 日～2 日
- ⑲ MASAHIKO INOUE、Family support programs of ASD Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders、日米自閉症スペクトラム研究会議、日本財団ビル、2011 年 12 月 1 日～3 日

〔図書〕(計 13 件)

- ① 井上雅彦、井澤信三、明治図書、Q & A と事例で理解する高機能自閉症・アスペルガー症候群への思春期・青年期支援 今日から役立つ「自閉症」思春期からのトラブル解、2012、184
- ② 井上雅彦、学研、家庭で無理なく楽しくできる生活、自立課題 36、2011、189

- ③ 井上雅彦、吉川徹、正文、加藤香、学苑社、発達障害の子どもをもつ親が行う親支援、2011、150
- ④ 井上雅彦、藤坂龍司、学研、自閉症のこどものためのABA基本プログラム(2) 家庭で無理なく楽しく出来るコミュニケーション課題 30、2010、205
- ⑤ 井上雅彦、梅沢雄二、エンパワメント研究所、自閉症支援の共通理解のために自閉症支援の最前線さまざまなアプローチ、2010、143

○出願状況（計 件）

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

〔その他〕
 ホームページ等

井上 雅彦 (masahiko inoue)
 鳥取大学・大学院医学系研究科・教授
 研究者番号：20252819

(2)研究分担者

加藤 哲文 (tetuhumi katou)
 上越教育大学・学校教育研究科・教授
 研究者番号：90224518

松岡 勝彦 (katuhiko matuoka)
 山口大学・教育学部・准教授
 研究者番号：70312808

(3)連携研究者

6. 研究組織
 (1)研究代表者